第87号

あらかわ区報Jr.ジュニア

ArakawaKuhoJunior

平成26年9/16

発行　荒川区●23,000部発行
〒116-8501 東京都荒川区荒川2-2-3 ☎(3802)3111

奥の細道 矢立初めの地で 俳句に親しもう！

今年は、江戸時代の俳人・松尾芭蕉が生まれて、370年。東北・北陸を巡った旅の紀行文「おくのほそ道」は、松尾芭蕉の代表作として知られ、区との関わりもあります。今号では、「おくのほそ道」と俳句のつくり方を紹介します。

問合せ　文化交流推進課　☎内線2521

一緒に俳句を楽しもう！

ばしょうくん

旅の途中でたくさんの有名な俳句が生まれたよ

156日間の旅だったんだね

歩いた距離は約2,400キロメートル！

俳句をつくるための旅で、最初に句を詠むことを「矢立初め」と言うんだよ

行春や鳥啼魚の目は泪

松尾芭蕉

「おくのほそ道」は、松尾芭蕉が弟子の曾良と共に千住を旅立ち、東北・北陸を経て岐阜県大垣市まで旅をした156日間を、文章と俳句で記した紀行文です。旅の目的のひとつは、和歌に詠まれてきた東北・北陸の名所・旧跡を訪ねることだったと言われています。初めて訪れた地でのさまざまな体験から、たくさんの名句が生まれました。

矢立初めの句「行春や…」の俳句は、松尾芭蕉が千住大橋で見送りの人々に別れを告げ、旅立つ際に詠んだ俳句です。そのため千住は、矢立初めの地と呼ばれています。当時の旅は、長く険しい道のりで大変なものでした。芭蕉の紀行文「おくのほそ道」には、友人や江戸のまち・風景との別れを惜しみながら、北へと旅立つ際の気持ちが表現されています。

区内に残る奥の細道の史跡・文化財を紹介します！

はかせ

現在の江東区に住んでいた松尾芭蕉は、舟に乗り千住まで隅田川をのぼり、千住大橋を渡って奥の細道への旅に向かったと言われておるんじゃ。橋をはさんで南北には「千住宿」と呼ばれる日光道中（コツ通り）の最初の宿場町があり、多くの人々でにぎわっておった。素盞雄神社には、江戸時代に建てられた芭蕉の句碑がある。みんなも一度訪れてみるとよいぞ。

▲徳川家康が江戸に入って、初めて隅田川に架けた橋です。この辺りは江戸の北の玄関口であり、たくさんの人が旅立ちました

◀素盞雄神社の境内には芭蕉の姿と「行春や…」の矢立初めの句を刻んだ句碑があります